

## 所 感

# 滞 仏 所 感 の 内 よ り

——日本の教育の問題省察の為に——

関 屋 光 彦

### 滞仏の経過とその意図

1962（昭和37）年11月より、一ケ年の予定で、私は在外研究に出掛けることが許されたので、フランスに赴き、パリを根拠地とし、ここに居住して満一ケ年を過した。その間ベルギー、スイス、地中海（イスラエルとギリシャ、イタリー西海岸）及び南仏、英国への旅をも試みることが出来た。滞仏を了えて、西独とスイスに立寄って後、アメリカ合衆国へ渡り、カナダをも訪れ、三週間余りで、帰路を全うし得たのである。

現在 ICU で、主として人文科学科に所属し、十年来西洋哲学史の授業を担当し、フランス哲学についてはかねてより関心を寄せて来たが、幸いパリに多年在住し、ソルボンヌでも七、八年来講義を有っている義兄の森有正氏に、着仏の時から万般相談に乗って貰うことが出来たので、新学年始まって間もないソルボンヌで、現今フランス哲学界の指導的地位に在る Jean Wahl, Vladimir Jeankél-vitch 教授などの講義を聴く事が得策なるを知り、翌年五月下旬の年度末まで聴講する事が出来た。両教授のこの年度の講義題目は夫々以下の如くであった。

Jean Wahl: Exp rience métaphysique「形而学的体験」

Vladimir Jeankél-vitch: Le pardon「赦し」——之は数年連続で講述されている道徳哲学講義の一環をなすものである。

このほか Montaigne 研究に造詣の深い Leb`gue という教授の、Essais 第三巻についての講義も聴くことが出来た。（これらについて、

得る所少くなかったが、本稿の意図からは外れるので今は立入らない。）

私はまた、ICU で兼ねて教育部門にも属し、基督教育哲学研究の一員に加わっている者として、この際特にペスタロッチについて少しでも認識を深めて帰りたいと思い、前後三回スイスを訪れ、チューリッヒの Pestalozzianum（即ペスタロッチ・インスティテュート）に出入し、第二回の旅ではペスタロッチ活動の旧跡を殆んどすべて、十日間余を費して踏査することが出来た。また、この折りローザンヌで、この地の大学の名誉教授であり、ペスタロッチについてもプロテスタントの立場から研究され、『活けるペスタロッチ<sup>(1)</sup>』の好著も有たるるルイ・メーラン教授の知遇を得る合せが得られた。

しかし、私の主たる滞在地はフランスであり、一年という限られた期間に於てではあったが、能う限り一般のフランス人の、人間としての性情、市民、国民としての特質について、多くの、そして少しでも確たる認識を得て帰りたい、これが終始胸裡に存していた念願であった。幸い、彼等がごくあたりまえの市民生活を営んでいるパリの町<sup>なか</sup>中に、前後一ケ年、伴っていた家族と共に生活し、特に滞在の終り近づく頃には、フランス・プロテスタントの人々、その家庭と、幾つかの親しい交わりも得られたりなどで、フランス人の性情、特質については——日本では案外に不十分にしか知られていない面にも——触れ得、確かめることが出来たように思う。

日本の教育の諸問題、その基本問題を考える上に、二千年の文化と歴史とを有ち、最近にも敗戦の経験を有ち乍ら、今日政治的にも独自の立場を保持しているのみならず、世界の第三勢力のリーダーとさえ考えられる程に有力であり、学問、文化に於ては世界に在って常に指導的立場を失わぬフランスという国の、国民生活の実態に触れ、彼等の、人として、市民、国民としてのあるが儘の姿について観察し得たことは、益もまた少くなかった。帰国して、時の経過と共に日本の現状に即して種々考慮をめぐらす時、いつも連想されるのは、聞き慣らされた、しかし古びぬ真理を蔵する「他山の石、以て玉を攻<sup>おさ</sup>む可し（詩経、小雅）」の一語である。それで、不

足も諸の限定もなお多々感ぜられる観察からではあるが、著しく目に映じ、また考えさせられた事共で、われわれ乃至は私自身、教育問題省察の為に直接間接に役立ち得ると思われる諸点を、以下認めてみよう。

### フランス人から得た一般的印象

アンドレ・シーグクリードは、その『諸国民の精神』という著書<sup>(2)</sup>の内、フランス人又は国民について論じている章で、次のように言う。

「外国人は、フランス人をともすれば派手な、軽っぽい存在で、何事によらず真面目に話をする事の出来ない人達と考えがちである。この見方は、何と誤りも甚しいことか！」と。

日本でも、フランス人と言えば、何か気の利いた、いきで垢ぬけした、機知に富んで、流行の尖端を行く人たち、ぐらゐに考えられていることが多い。しかし彼等の市民生活の中に立交じってみて、こう言った見方が皮相、或いは一面的であることを、つくづく思い知らされた。一般のフランス人は、むしろ地味で、すこぶる堅実と評する方が当たっているように思う。彼等の生活の様々な営みを見るにつけ、その感を深うした。

私にとって甚だ印象的で、そしてこの様な性格を象徴的に示しているものとして、彼等の営みのあらわれの一つである道路及び聞き及んだ或る土木工事の一事例から考えてみたい。滞仏一年の未だ半ばならぬ頃から七ヶ月近く、私は自動車を、殆んど自分の専用の如くに使用する仕合せに恵まれた。盛夏二週間許りの英国への旅行も、そのあとペスタロッチの旧跡を尋ねることを主目的とした二週間余のスイス旅行も、パリを起点として自分の操縦で、すべて自動車に拠ったが、一方フランス国内も、中仏、ノルマンディー方面への小旅行をも含め、八千杆位は走った。従ってフランスの田舎道も、あちこち歩いたわけである。ところで、道路が国道ならぬ県道、いやそれより下級の幅の狭い道であろうとも、質に於て次第に粗末になって行くことはなく、何処も一様に、堅牢、確実に舗装されているのに、驚きを禁じ得なかった。パリで常に目に触れる一寸した歩道でも、少くも

一米は掘下げ、そこから築き上げて固めていることは、話にも聞き目にも見たけれども、田舎については、日本的な頭で考えていたせい、道路の質に関し大いに気掛りであった。しかしそれは、全くの杞憂に終わったのである。フランスでは、アメリカ、カナダまたドイツに比して、大規模な自動車専用道路は頗る未発達の状態にあり、その総延長キロ数は、日本の昨今の状況に比べ、劣るかも知れない。にも拘わらず、都会の外では速度制限は無く、中型車でも差支なき限り、110キロ位の高速で走るが、それでも心配はない。道路に修理の箇所がある場合には、早くからその旨を明示し、その箇所より三、四百米も前から、80、60、40、25と言った具合に、スピードを低下させるよう制限標識が逐次立てられ、万全の配慮が払われている。民衆一般の生活に直接かかわりある道路が、その縁に沿う歩道と共に、到る処一様に、確実に整備されている。大がかりな自動車専用道路の拡充発達をこそ急がないけれども、既存のもので、当面の必要に応ずるに堪え得るよう、十二分に手が尽されている。

聞き及んだ或る土木工事の話とは、以下の如くである。パリ、エッフェル塔の近くに在るユネスコ本部で、その庭園の為に、日本風の池を掘ることとなり、日本から専門の庭師を招いた。ところで池を造るに先立ち、その池と同一形状の池床をコンクリートで固める工事が、フランス側の手により施された。しかるにその工事を見ていた日本からの庭師たちは、その床の厚さと言ひ、工事のやり方があまりにも徹底的なのにただ驚き呆れるばかりであったという。「か様な工事は、日本ではかつて為されたためしがない」とか「これならば、数百年を経ても池の壊れよう筈がない」とか語り合った由である。

とにかく、堅牢にして確実なることを旨とし、人目につかない所でも決して手を抜かない、することが根本的、徹底的で基礎からしっかりたたき上げて行く、この様な精神は上記事例の様な分野にだけでなく、生活のあらゆる面に行亘っているように思われた。

パリ市の都市計画にしても、数十年の期間を単位とし、恒久的視野の下

に考えられ、且その時々政治情勢に左右されることなく樹立され、また実現されてゆくと聞いた。しかしこれも、例えば現在のルーヴル博物館の西に続く、16世紀後半に創められたチュイルリーの庭の遠景3,000米の地点に、造園の250年近くも後に、距離のプロポーションと全体の調和とが十分考えられつつ、ナポレオンの命による凱旋門が建てられた事などを思い併せれば、異とするに足りないことなのであろう。

日常生活の身近な面で、例えばマッチの小箱一箱にしてみても、その中に一本の使用に堪えぬ粗悪品を見出すことは、頗る困難であった。日用品その他一般の商品についても、「見掛け倒し」という思いをさせられることは殆んどなかった。安いものは安いものなりに、期待されるだけの機能は十分果し得る、と言った具合である。「広告的」或いは所謂「商業主義的」という風は更になく、日刊新聞でも、商品に関する広告は、日本のそれに比して、驚くほどに少ない。「フランス人は商才に乏しく、商売は下手なのではないか」と訝かりたくなる。商業についてかれこれ評する資格は有たないが、ただ一消費者として、商品は、時にその出来栄えが無骨とさえ感ぜられることは有っても、確実で、実質を具えている、とだけは言いえよう。これは、質を常に問題にし、良心的に仕上げられた物を尊び、まやかしかや、実質を伴わぬものに対しでは我慢がならず、仮借する所のないフランス人の通有性に依るものと思われ、こんなところにも彼等の堅実さが感ぜられた。

生活環境や、生活に供される物資などの面からの印象の記述が先立ったが彼等の生活振り、生活態度はどうであろうか？パリは「花の都」と呼ばれ、歓楽に明け暮れる大都会のように伝えられるけれども、そんな歓楽の世界は実に極めて限られた小地域のことである。着仏後間もなく義兄（森有正君）から「パリ市民の大多数は、物すごく勤勉なのですよ」と聞かされたが、町中に居住するようになって、その実相に触れることが出来た。パリ市は、北緯49度近くに位置し、南樺太の北方と同緯度に当る。冬は、午後四時過ぎれば暗くなり、朝は九時頃にならないと「夜が明けた」

という気がしない。しかも勤労者達の足である地下鉄のラッシュ時は、冬でも七時を過ぎた頃である。居住していた町の界限は、七時ともなれば、すでに暗闇の中で活気づいていたのを思い起す。

一年を通じて毎朝、パリ市の塵芥掃除夫が、三人一組となり、特殊な形をした塵芥運搬のトラックで、受持ち地域の塵芥、廃品の回収にやって来る。明け方までに夫々の家屋の入口前に列べられ屑箱から、一切のゴミ、屑物を運び去ってゆくのである。暖かな季節となり、朝早くから明るくなって来た頃、寝泊りしていた四階のアパルトマンから窓越しに、これらの人達の仕事の様子を幾度か熟視したのであった。慌しくやって来て、大ザッパに仕事を片付けて行くと、いう風にではなく、静かに到着し、落付いて四方に眼を配り、時に箱の周囲に散乱しているヨゴレものをも、小さな一物をも残すまじと綺麗に仕末をつけ、最後に空いた屑物箱をキチンと並べて後、次へと静かに移動してゆく。常に落着いていて、積極的な義務感を以て事に当り、しかも何となく陽気に振舞い、短かい会話をやり取りしているユーモラスな姿は、眼底に残って忘れ難い。

社会の底辺に在って、文字通りチリあくたに塗れ、之と取組むという、人のいとわしく思う仕事に拘わらず、自主的に、自分の仕事として対峙し、キチンと仕遂げて行く姿から、深く教えられるものがあつた。労働者たちのこのような、仕事への誠実な態度、積極的意欲は、この場合と限らず、他でも見受けられ感ぜられた。自分の使用していた自動車を、二度三度修理工場に託し、或る時その仕上りを待ちつつ工場の中で一、二時間を過したことがある。運転に関係の有る主要な箇所の修理はすでに終り、あとは外まわりの簡略に済せ得る箇所であつたが、「簡略でよいから」と申入れても、余念なく仕事に身を入れ、自分に得心がゆく程度に仕上げねば己まぬ様子に、先を急ぐのを諦め、静かに仕上りを待機したのであつた。周囲になお幾人かの工員が、夫々仕事に当たっていたが、悠容迫らず、さればとていささかも手を休めることなく、着実に仕事を進めているのみであつた。

学校教育の面で、「基礎からしっかりたたき上げてゆく」やり方は、今

日行われている。義兄（森有正君）の長女は、パリ中流家庭の子女の学ぶ、歴史の古いサント・バルブという高等学校 Le Collège Sainte-Barbeに通っているが、そこではラテン語を始めその他の教科についても、周到な配慮の下に編纂された教科書により、きびしい訓練が施されている。学期期間中、日々課される宿題を抱え、休日のほかは反復練習と勉強に真剣に専念しなければ、学校について行けない様子であった。これが一般に中等教育における実状の如くである。バカロレア（大学入学資格）取得の試験を除き、多数の生徒には大学進学が予想されているわけではない。従って受験、進学の為めの教育ではない。学ぶ教科を「わがもの」とさせる処まで教育しなければ己まないという精神に基くものと思われる。

とに角、堅実、質素、地味で、良心的なものを評価し、まやかしや中味の無いのを嫌い、遠慮、容赦はしない、強靱な精神を有っている——などが、まず一般に感じ取られた印象であった。

## フランス人の性格と生活の諸様相

### 1. 個人主義と社会的観念

フランス人が個人主義者であることについては、異論を挟む余地はないと感ぜられた。自身フランス人であるアンドレ・モーロワも、その著『フランス及びフランス人の姿』<sup>(4)</sup>に於て、この事を自認している。この書の最初の章「国民的特質」を述べている所で、「個人主義、その美しい価値のもつ欠点」との見出しを附して、次のように言う。「おしなべてのフランス人はだいたい、個人主義者である。かれらは、自己の知性に信頼をもち、<sup>(5)</sup>いつもひとりで万事を処理している……」と。更に彼は言う、「個人生活におけるフランス人の理想は、独立である」<sup>(6)</sup>と個人主義的で、独立心に富み、之を貴ぶ様子は、パリの町に一步足を踏み入れるだけで、誰しも著しく感じ取る所であろう。

街頭で地図を拡げ、目指す進路を探索し、また地下鉄はどの路線に依ったものかと、案内図と取組んで思案しているような場合でも、こちらから

敢えて誰かに問い掛けることなしには、誰かの方から進んで手助けに来て呉れることなどは、極めて稀であった。そんな時、頼まないのに寄って来る人があれば、パリでは少々警戒した方がよい、と言う風である。英京ロンドンで、私達の滞在は短時日であったが、‘Can I help you?’の言葉で、傍へ来る人のしばしばであったのと著しい対比が感ぜられた。その他郵便局の窓口や、英語を弁ずる受付係のいない大多数の中級以下のホテルや小売商店などで、新参の旅行者、滞在者にとっては、「フランス人とは、何とソッけない、温か味のない、殺風景な人達なることよ！」との印象を受取る事がしばしばであろう。ともかく異国からの来訪者に対し、「もっとよく知らせて、わからせ、心地よく」という事は、フランス人の間でも反省、向上の必要が感ぜられている、ときいた。しかしこの地の生活に慣れ、彼等の性格も呑み込みがつくと、こんな対人態度も勿論悪意や、また芯からの不親切によるものでないことは解った。ただ根っからの個人主義で、「必要以外のことには一切立入らない」「お節介は焼かない」という精神に徹している所からと思われる。反面に「打てば響く、叩けば応ずる」という面のあることは、大いに事実なのである。

社会的協同の営みはどうも不得手であるが、社会的な観念を欠いてはいない。路上を重い荷物を担ってゆく老人がある場合、むやみに之を助けようとはしないし、老人の方でも容易に助けを借りる意は有たない。しかし必要、必須と判断される場合には、進んであかの他人が援助に当る。例えば交通頻繁な大通りを、労苦し乍ら横断する老人のあるような場合には、誰来るともなく傍により添い、進行して来る自動車を差し止め、渡り了せるまでは離れない。ソルボンヌその他の諸学校の多く所在するラテン地区の出入口をなしているルクサンブール駅は、地下のホームから路上へ出る迄、階段が二重になって手間が取れる。或る時、階段の手すりに沿ってどうやら登り始めた老婦人の後方に、元気よく足を進めて来た大学生らしき数人の若者の一群が有ったが、その中の一人が静かにこの老人に近ずき、片腕で支え、年寄りのペースに合わせて徐々に登り始めた。残りの三、四人



もその後方から、歩度を落して同行し、最後の一段が済むまで静かに付き随っていたのであった。しかしこれらのことも、極めて当然の事の様になされ、用が済めば若者たちはまた群をなして立去って行った。

街頭で、自動車事故が発生した様な場合、これを目撃した通行人達で、真相に確信を有っている人々は、当事者と縁もゆかりもないのであるが、進んで証人 *témoin* に立つ意志の有る事を表明する。被害を受けた者に対し、自分の住所氏名を伝え、必要な場合に知らせを寄せるようにと言い置いて立去って行く。これが通例の事の由きいた。個人の権利は大切に守られねばならぬという、社会正義の観念から、殆んど反射的と言ってよい位に、こういう行動に出るのであろう。

日常の社会生活に在って、必須不可欠の秩序だけはキチンと守る、之が市民としての当然のたしなみとなっている様に感ぜられた。そぞろに、旧約聖書ヨブ記（38章11節）の言葉が想起されたのである、「ここまでは来るべし、ここを越ゆべからず、汝の高浪ここに止るべし」。パリ市民の足である地下鉄のラッシュ時であっても、駈け足で通路の先を争うことは見られず、ホームへは順番を守って入場する落着いた姿、又夜おそくであっても、乗客はくつろいでこそいるが、取乱した様子をしている様な場面にめぐり合ったことは絶えてなかった。

或る日本からの、音楽専攻の為、二、三年滞仏をつづけて来た女子留学生に、祖国の実家から託された言伝物を渡す為めに、夜私共の宿所まで出向いて貰ったことがあった。着仏後間もない頃で、東京の頭で考えるので、夜だから少しでも早く帰さねば、と気掛りに思いつつ面談した処、「劇場にせよ、音楽会にせよ、夜の開演は九時からで、終るのは十一時半頃となりますが、パリ市内、女ひとりでも、全然帰路を心配する必要を感じないのです」との彼女の言葉であった。その後暫くを経て、矢張り彼女の言葉通り、相当晚い時間でも、パリでは女のひとり歩きも心配はないと信ぜられるようになった。これは社会公共の場所で、婦人に対し、慎しみのない言動は許されないという風習の厳存していることからであらう。

## 2. 公園、散歩道など

パリに在って、われわれから見て特に羨望に堪えないのは、大小の公園と逍遙を許す散歩道の実に豊かなることである。行政区画の上では、双方共パリ市郊外に属しながら、市の東と西に直ちに繋がって巨大な地域を占めているブローニュの森 **Bois de Boulogne**、ヴァンセンヌの森 **Bois de Vincennes** の二大公園がある。都市の東西両端をおさえ、東西よりこの大都会を擁しているかの如くである。双方共略々同様の面積で、夫々約 900 ヘクタールすなわち三百万坪に近い。各々が東京の上野公園の十倍を遙かに超える広域である。また市内には、中央にチュイルリーの庭園、ルクサンプール公園が有り、またモンソー、モンソーリ諸公園や植物園の広庭、それに中央のノートル・ダム寺院を始めとし、市内到る処に建っている古くよりの名伽藍には、一寸した広さの後庭、或いは側庭、前庭が附随し、公衆の立入りが自由であり、町の中心部、公私の諸建築がイラカをつらね、相互に犇めき合っている間にさえ、一寸した空間が小庭を形成し、民衆に対して開かれ、その休息と子供達の遊びの場所として供されている。

またパリ市を東から西へと蛇曲し乍ら貫流しているセーヌ河については、市の中心部、最も繁華で、路面交通最も輻輳の激しい地帯を流れているあたりに、一たびその河沿いの大通りから階段を川べりへ降りると、そこは一切車馬の通行はなく、繁忙な世の騒音を他処にして、静かに流れる水面に眼をやり乍ら、散歩、逍遙をほしいままに出来る快適の場所が備っている。

ヴァンセンヌの森の北端中央には、十四紀に城砦であった古城がそのままに存置され、ことにこの森の鬱蒼奥深い樹木は、人工の植林に依るものではなく、原始の自然林がそのままに、数百年を経て今日まで存続して来たものとの事であった。

か様な環境が、一面に於て時代の最尖端に在り、そこには当代の風の吹きまくっている近代的大都会のうちに、保有され、具わっているこの事実

には、長嘆息、三思せしめられずにはおかなかった。幾世紀を経て居住し生活して来た住民の、己まぬ精神的需要が、かかる環境をも形成させ、保たせて来たからであろう。

邦貨30円そこそこの、たった一枚の地下鉄の切符で、市の片方の端から半時間で他の端に至り、大自然の幽邃の境に身を置くことが出来るし、都心部で限られた昼休みのひとときでも、セーヌの高い河岸から、一、二分にして川べりへ降り立てば、それはのどかな陶然たる世界である。

特に——この項の始めに特性としてフランス人の個人主義を挙げたが、——この個人主義の故に、人が数多くそこに在っても相互に個人の精神生活害し合うことがないから、セーヌの川べりにせよ、町角に猫の額ほどの小地域を活用してしつらえられた小庭に於てにもせよ、静安がある。同じベンチに、肩を並べて坐っている隣人からさえも煩わされず、心安らげく精神の自由が得られる。哲学書をも繙読出来るし、瞑想、思索に時を過すことも出来る。激しき活動としじまなる静安、潑刺たり行為と深邃なる思索、人間生活に於けるこれ等両極の均衡が、か様な環境の故に保たれ、創意ある力強き営みと展開されるのではないかと思われた。

### 3. 家庭生活について

ブローニュー、ヴァンセンヌの両公園には、日本からの知友の来訪の機会や市内で気忙しい日々を過している合間などに、幾度か出掛けたものであった。日曜日や休日に人出の格別多いのは申す迄もないが、この際目に著しいのは、その大多数が、家族打揃ってという情景であった。

何しろ、すでに述べた様に、宏大な境域のことであるから、相当な人出であっても、おのがじし何処かの一隅を得て落着き、携えて来た弁当や茶菓をくり拵げ、団欒に時を過す。樹木も少ない——日本ならば早速少年野球の試合でもが展開されそうな——広闊な地所の三つ、四つは、一地域にも容易に見出される。ここで、親とおぼしき年長者達も、ワイシャツ一つで立交って、或いはフットボールに、或いは模型飛行機を空に飛ばせるなど、無邪気なスポーツに、余念なく打興じているのである。

フランスでは——イギリスその他の欧州諸国でも今日なおその風を留めているであろうが——家庭生活における秩序は、殊のほか保守的で、厳然たるところがある。社会生活においても、又学校——大学に於てさえ然りである。社会的に未だ一本立ちしていない若者であれば、大学生と雖も、親に対し一人前の発言権はない。そして幼少者に対するしつけのきびしき事は、すでによく知られている通りである。

滞仏の後半頃になって交りを深めた或る仏人中流の家庭を、或る時私共夫婦で訪れた。戸を開いて、私達を取次いだのは、十三、四になる男の子であったが、その際戸口に近い廊下や部屋で弟達二人と模型玩具の遊びに没頭していた処だったらしい。しかし取次いだ長男は勿論のこと、弟達も直ちに遊びを放擲し、夫々立って私達に向い、礼儀正しく挨拶をした。始めて会う私達であったけれども、親の心安い客と知って、長兄に倣い直ちに礼儀を全うし得たのである。これは一例であるが、特殊な例ではなく、他の諸家庭の場合でも、また大学生達に接した機会にも、礼節を弁え、年長者への敬意を失わぬ態度が、身についていると感ぜられた。

か様に家庭生活に在って、一面にはケジメ、秩序が守られて居りながら、他面老若渾然打解け合える *human* な人間関係がある。ブローニュの森などで目撃した、親も子も一緒になって無邪気な楽しみに、我を忘れて打興ずるなどの姿は、その現れであろう。

「フランス人は個人主義者であって、その行過ぎ乃至は弊害——それは文学作品や映画に鋭く浮立たせて示されている——の故に、果して健全な家庭生活は、一般的に維持されているのだろうか」との疑問は、着仏当時の私にも、脳裏に去来しなくはなかった。

しかし、上掲のような様々な観察、経験をする前から、着仏後間もなく日曜毎にパリ郊外に住う義兄宅を訪れて、彼に連れられ周辺の町々の風景を見せられた時、場末の最も庶民的な人達の質素な、しかし楽しげな、家庭本位の休日の過ごし方に触れ得て、フランス人は家庭を非常に大切にする人達との印象を、先ず以て与えられたのだった。

フランス、アカデミーの会員で、歴史の研究に学殖豊かなミルポアという人の近業に、『フランス個人主義の偉大さと惨めさ』という、全三巻の著作がある。<sup>(7)</sup>個人主義という視点に立って、フランスの歴史の、起源より現代までに照明を当て、討究した労作である。彼はその結語に於て言う、  
 「個の確立は、それが何らかの行過ぎを伴うように思われても、我々は多くの心配をするには当らぬと思う。その行過ぎとは、長所の有つ反面の欠点なのだから。それは又、個々人の生活への国家の侵害に対する保証でもある」<sup>(8)</sup>と。そして、「フランスの個人主義は、人類的觀念に立つ、人間らしい人間の前衛をなしている。至って訓練不足であるだろうが、しかし常に覚醒し目を見張っている前衛なのだ」<sup>(9)</sup>と。か様に著者は、フランス個人主義をかけ替なき価値と役割を有つものとして、先ず定立しているが、一方に彼は、家庭というものが、史的に見て、フランス国民生活の下部構造を構成して来たことを指摘し、更に彼は、「家庭というものは、そこに於て、功利打算抜きの精神が本能的に発現し得る唯一の自然的な集合体である。家庭の精神が向上進歩する処に、社会的觀念、公共的精神の進歩発達がある」<sup>(10)</sup>と説く。そして「個人の諸能力は、よくそれらを理解し、それらのニュアンスに目を留めて、最善の方向にそれらを発達させるようにうまく態勢のとれた（家庭的）愛情という楯の下に、養われ、強壮なものとなるのだ」<sup>(11)</sup>と述べて、健全にしてすぐれた個人主義は、善き家庭により、護られ育成されるという、両者の密接不可離の關係に論及している。

私は、真面目な中産階級の家庭の実相に触れて、この学者の所論が肯かれ、そしてその主張への現実的な裏付けが得られたように思った。

#### 4. 個人主義及びナショナリズムと人類的觀念

フランスの個人主義については、様々な角度から、十分な考察を試みる必要があると思うが、今ここには所感として、次のことだけは言い得ると思う。すなわち彼等の個人主義は、「利己主義」の同意語と考えられてはならぬこと、そして非常に主我主義的に見える場合もあるけれども、本質的には、さきのミルポアも「人間らしい人間のの前衛」と力強く述べている

ように、非常に積極的な意義を有つ、ということである。

ところでフランス人は、一方に個人主義の化身の如くであるが、同時にすこぶる民族主義的、愛国的である事は、世のひとしくみとめる処である。  
ナショナリスティック  
 今次大戦末期におけるレジスタンス運動は、その証左として直ちに考えつく適例であろう。然らばそのナショナリズムは、ナチス、ドイツの場合のように、本質的にショーヴィニズム（盲目的愛国）であるのか？民族至上主義的、超国家主義的なものなのであろうか？——日本人も、特に昭和の始めから第二次大戦の時期にかけて、一般的にこの過誤の深淵に落ち込んだ——。

この疑問に答えて、善き解明を与えるものとして、ゴールティエという仏人——彼も亦学士院会員であったが——の、第二次大戦以前に著した『フランス精神』という書物の一節<sup>(12)</sup>を挙げたい。そのむかし私は、この書をひもといたが、この度の滞仏経験の後に再び之を読み返して、そこに単なる一著者の古き一家言を見出すのではなく、良識 *bon sens* を有った現今のフランス人の真骨頂が見出されるように思った。著者は言う、

「フランスに於ては、国民という觀念と文明という觀念は合致している。E. クルチウス〔仏文学研究で高名なドイツの学者——筆者註〕がいみじくも認めているように、フランスの国民意識は自然的に普遍性へと高まる。何となればフランスは、国民たることを通して、普遍的、人類的觀念の守護者であることを自覚しているから。フランスは、人類的精神への奉仕の任務を保持すべき意識を有っている。エルネスト・ラヴィッスは確言している、＜フランスと人類的精神とは、互いに相反する二語ではない。双方は、密接に結合しており、不可離である＞」と。

上掲のミルポアの言葉、著者の所説、そしてその中に引用されている歴史学の大先達のラヴィッスの言葉、その何れもが決してフランス人の手前味噌、自賛の言葉とは受取れない。むしろ、個人主義とナショナリズムとの、も一つ高次元の処に絶えず導きの星となっているユマニテ *humanité*——人類的精神、人類的觀念——が、所謂「觀念」又は「理念」として離

れて彼方に在るのではなく、生活のうちに滲透し、個人主義をも国民的意識をもすぐれた意味に於て生かし、個性ある、暢達なる姿に於て發揮せしめ、普遍性ある文化の形成への動因をなしているのではないかと思われた。

このほか、フランス人に於ては、「歴史が市民乃至は国民の現在の生活とつながりを有っている」と認められた点や、また「地方的特色の保存、尊重の念——郷土愛——が十分みとめられた」ことなど、わが国の教育の基本的なあり方に関連させて、国民生活今後の在り方の上に、意味深い示唆と反省を与える様な現実「直面させられた」との体験を有った。しかしこれらについては、問題点として挙げるに止め、詳論は別の機会を期したい。(本学教授)

註

- (1) Louis Meylan, *Actualité de Pestalozzi*, Les Éditions du Scarabée, Paris. 1961.

本書については、著者より筆者へ和訳の快諾が与えられて居り、目下訳業準備中である。

- (2) André Siegfried, *L'âme des peuples*, Hachette. 1950.

- (3) 同上 p. 68.

- (4) André Maurois, *Portrait de la France et des Français*, Hachette. 1965.

- (5) 上掲書、松尾邦之助和訳、「フランスとフランス人」岩波新書版、昭和32年刊、p. 12.

- (6) 同上 p. 15.

- (7) Duc de Lévis Mirepoix de l'Académie française, *Grandeur et misère de l'individualisme français*, La Palatine, Paris et Genève.

Tome I, Des origines à la Fronde, 1957.

Tome II, De Louis XIV à la Révolution, 1959.

Tome III, De la 1<sup>ère</sup> République à la V<sup>ème</sup>, 1962.

- (8) 同上 Tome III, p. 276.

- (9) 同 p. 277.

- (10, 11) 同上 p. 278.

- (12) Paul Gaultier, de l'Institut, *L'âme française*, Flammarion, 1936. pp. 313~314.

## On the French People

—Some Suggestions for Our Problems of Education—

Mitsuhiko Sekiya

(English R sumé)

1. The Purpose and the Course of My Stay in France
2. General Impressions on the People  
Their Steadiness, Sobriety and Industriousness
3. The Character of the French People and Several Aspects of their Life  
—Individualism and their Sense of Society  
—Parks and Promenades; their Influence upon the Civil Life  
—The Family Life
4. Individualism, Nationalism, and their Sense of 'Humanité'  
Comments on further Problems: their Historical Sense reflected upon the Civil Life and their Love of Native Province